



# 古事記は出雲 が書いた

---

---

中西正矢

---

第一章 天皇家の正統性などひと言も主張していない

神話は天照大神を讃えていない  
天皇の悪口を書く  
出雲神の祭祀から歴史を始めた  
古代天皇の皇后を出雲神の子だとした  
『記紀』編さんの背後に出雲氏族  
天皇に無礼な出雲国造の祝詞奏上

第二章 天照大神は鏡を宮中から出すなど言った

伊勢神宮は存在してはならない  
天皇は誰も伊勢神宮を訪れなかった  
天照大神が最高神に決まったのは明治時代  
伊勢は太陽信仰の聖地ではない  
天照大神は太陽神ではない  
伊勢神宮は東方進出の基地ではない

第三章 皇祖の祭祀はヤマトから追放され伊勢に幽閉された

出雲神を祀らなければ殺される  
四百年も放っておかれた伊勢神宮建設  
内宮よりも外宮を先に祭る  
外宮の鎮座記はウソを書いている  
伊勢神宮の奇妙な祭神たち

第四章 神社は出雲が発明した

外宮の度会氏が北陸遠征  
度会氏の正体は出雲氏族  
外宮は内宮への交通を遮断する関所  
出雲が外宮を建てた  
全国の大社・古社は出雲神を祀る

第五章 スメラ尊は日本を守るために選ばれた

大量の弥生人など渡来していない  
基調文化も教わっていない  
スメラ尊は飛騨で選出された  
天照大神による日本列島防衛

高天原は飛驒であった  
地名に残る歴史の痕跡  
出雲も朝鮮半島から日本を守った  
スメラ尊は日本の大黒柱

## 神話は天照大神を讃えていない

---

飛騨の丹生川地方に、日本建国の様子を伝えた口碑が存在していた。

そこにはスメラ尊誕生の経緯から、「出雲国譲り」「天孫降臨」「神武東征」などの言葉に隠された史実と、出雲が大和朝廷の権力を握ったことなどが述べられている。

本書はこの口碑を検証したものである。

### 【飛騨の口碑 要点】

- ・天照大神は飛騨に生まれた実在の女性
- ・異民族の侵略から日本列島を守るために、日本を統一（前一世紀）
- ・出雲人が、全国に出雲神信仰（神社）を広め、権力を掌握（三世紀）
- ・史実を神話に変えて『記紀』を編さん

これらを直接証明するのは、どう考えても無理がある。

そこで、まず『記紀』は「天皇家を軽視し、出雲を重視している」ことから始めて、「神話に変えられた史実」へと検証を進め、口碑が真実を述べていることを明らかにしたいと思う。

そのために最初に反論の余地の無い事実を挙げ、これを自明の真理として、その上に論証を積み重ねていく。

その自明の真理とは「神話は皇祖の天照大神を讃えていない」である。

誰が言い出したのか知らないが、「『記紀』は天皇家の正統性を主張するために書かれた」とされている。

しかし、それが正しいならば、神話は皇祖の天照大神を大いに讃えているはずであるが、実はその様な文章はひとつも存在していない。

それらしき箇所として「誕生」と「天岩戸」の二つを『古事記』から挙げてみる。

### 【誕生】

「イザナギ尊は、天照大神、月読、スサノオを生み『三貴子を得た』と言った。」

イザナギ尊が貴い子を得たと言っても、三子が横並びの同格として述べられており、決して天照大神だけを尊いと言っているのではない。

それに皇祖神誕生の話としては、あまりにも簡単すぎる。

【天岩戸】

「天照大神が岩戸に隠れると、高天原や葦原中国が暗くなった。」

岩戸に隠れた理由は、弟スサノオの乱暴に「畏れをなした」という私情からであり、それで「隠れたから暗くなった」と言うのでは、他の者にとっては迷惑なだけの話である。誰もそれを以て天照大神を偉大だとは思わない。

おまけに天照大神は、神々の囃りごとによる楽しそうな笑い声を聞き、「自分が隠れているのに、どうして皆は笑っているのだろうか」と不遜にも不思議に思い、岩戸をそっと開けて外を覗いた際に、手力男に腕を捕まれ外に引き出された。これでは、如何にも傲慢で間の抜けた印象しか受けない。

この「誕生」と「岩戸」の二つの他には、天照大神を讃えているらしき箇所はどこにも無いのである。

神話はこの後、出雲神スサノオが困っていた人を助けるために大蛇を退治し、息子の大国主が数々の試練を乗り越えた末に国作りした、と展開する。

そして、そこへ天照大神が使者を送り「この国は、わが子が治めるべき」だと言って取り上げた。（出雲国譲り）

これではまるで横取りをしたような感じを与えられる。

しかも、この「出雲国譲り」の際の諸々の決定は、天照大神単独ではなく、すべて高木神と二人の名前で行われている。つまり、天照大神は決定権を持っていなかったと言っているに等しいことになる。

このように「神話は天照大神を讃えている」は大いなる勘違いなのである。

天照大神の神話と言っても、「天岩戸」と「出雲国譲り」だけである。他に大神がこれと言って何かをしたとは書かれていない。

よく『出雲神話』が神話の三分の一を占めると言われるが、実際は出雲神話と出雲関連神話（出雲国譲り）しかない。

『古事記序文』も、天照大神誕生を「日月、目を洗うに現れ」と実に簡単に書くだけで、月神の「月」とセットで「日」のたった一字で済ませている。（天照大神と月読は、イザナギ尊が左目を洗った時に、スサノオは鼻を洗った時に誕生）

これに対して出雲神スサノオは「鏡を掛け珠を吐きて、百王相継ぎ、剣を喰らい大蛇を切りて、万神蕃息せる（スサノオのおかげで、天皇家が続き、神々が増えた）」と、詳しく記されている。

この二神の扱いの差は誰が見ても明かである。

神話が讃えているのは、皇祖神ではなく実は出雲神なのである。

## 天皇の悪口を書く

---

戦前の教科書は、仁徳天皇（十六代）の「民のカマド」を挙げて、天皇の徳を讃えている。

「天皇が高台から見下ろすと、家々のカマドから煙が立っていなかった。それで天皇は民が貧しさに苦しんでいると思い税を免除した。」

『日本書紀』は天皇の言葉として「百姓貧しきは朕が貧しきなり。百姓富めるは則ち朕が富めるなり」と記している。

これだけを読めば、仁徳天皇は如何にも聖帝であるように思えるが、その後のことには一切触れようとしない。

実は仁徳天皇は大変な恐妻家で女好きであるかのように書かれている。

天皇には皇后がいた。しかし、玖賀媛を見初めて「この女性を可愛がりたいと思うが、皇后が嫉妬するのでできない」と言っている。

その後、皇后の留守中に八田皇女を宮中に入れた。そして皇后が亡くなると八田皇女を皇后にした。

さらに雌鳥皇女を後にしようとして弟を使い遣ったところ、その弟が横取りしてしまったので二人を殺した。

これが聖帝と呼ばれる仁徳天皇の『日本書紀』の記事である。

「民のカマド」は、明治政府がどうにかして天皇の徳を讃えようと、ようやく探し出した唯一の逸話であった。つまり、他には天皇を讃えた記事は何も無い。

それだけではなく、仁徳天皇の子の允恭天皇（十九代）は愚か、孫の安康天皇（二〇代）は夫を殺してその妻を奪った。同じく孫の雄略天皇（二一代）はすぐ人を殺す悪い天皇だと書かれている。

允恭天皇の皇太子は実妹と肉体関係を持った、欽明天皇（二九代）の皇子穴穂部は、兄の敏達天皇（三〇代）が崩御すると、もがり屋に忍び込んで皇后を犯そうとした、とも書かれている。

天皇を讃えているのは、かろうじて仁徳の一人だけだが、悪口を書いているのはこの様に数人も居る。

天照大神を讃えていない神話と併せて考えれば、『記紀』は天皇家の正統性などまったく主張していない。

ここでは詳しく触れる紙数はないが、允恭・安康・雄略天皇、穴穂部皇子の共通点は、いずれも出雲氏族との間に抗争があったことである。

## 出雲神の祭祀から歴史を始めた

---

『記紀』は神話として「出雲国譲り一天孫降臨一神武東征」を書き、初代天皇の神武から歴史が始まった様に構成しているが、それにしては二代から九代天皇の事跡が省かれている。

そしてその省かれた長い空白の後、一〇代天皇朝のトップに、三輪山の神社に大物主神を祀った話が大々的に登場する。

「疫病が大流行し、人々が死に絶えようとした。その時、天皇の夢枕に大物主神（出雲神の大国主命）が現れ、『これは我が意志である。大田田根子に我を祀らせれば収まる。』と告げた。

そこで大田田根子を探し出し、三輪山に大物主神を祀らせたところ、疫病も収まり天下は太平となった。」

「大田田根子は大国主の子孫であり、三輪氏・賀茂氏の始祖である。」（要約）

次の十一代天皇記も、出雲大社の創建談がその大半を占めている。

「皇子が生まれつき言葉を喋ることができなかった。

天皇の夢枕に出雲大神が現れ、『わが神の宮を、天皇の宮と同じくらい立派に造れば、皇子は話すことが出来るようになる。』と諭した。

そこで皇子を出雲に遣り、出雲神の大神宮を立派に造ったところ、話すことが出来るようになった。」（要約）

一〇代天皇記も十一代天皇記も、この出雲神の祭祀談が大半を占めている。

それだけではなく二代から九代天皇の事跡が省かれており、一〇代天皇を所知初国之御眞木天皇（はつくに・しらしし・みまきの天皇）と呼んでいるので、まるで日本の国の歴史は、初代神武天皇の東征からではなく、出雲神の祭祀から始まったかのような印象を与える。「初国知らず」とは、初めて国を統治する、つまり初代天皇という意味である。

一〇代天皇は崇神と諡をされたが、崇神の「崇める神」も皇祖神天照大神ではなく、出雲神のことである。

明らかに『記紀』の編纂者は、神話を出雲神話で占め、歴史を出雲氏族三輪氏の登場から始めようとしたのである。

## 古代天皇の皇后を出雲神の子だとした

---

『古事記』は、初代天皇神武の后を三輪の大物主神（大国主命）の娘とし、『日本書紀』は大国主命の子の事代主命の娘と記し、二代から四代天皇の后も事代主命の娘と孫としている。

しかし、これは世代数を数えると矛盾する話である。

①姉天照大神ー②天忍穗耳尊ー③ニニギ尊ー④ホホデミーー⑤ウガヤ尊ー⑥神武天皇

①弟スサノオ神ー②大国主命ー③事代主命ー④娘ー⑤孫

これも出雲を重視するために、初期の天皇の后に出雲神の娘を無理矢理当て嵌めたと考えられる。

## 『記紀』編さんの背後に出雲氏族

---

『古事記（七一）』も『日本書紀（七二〇）』も、天武天皇（四〇代 六八六没）の命により編さんされたと言われている。

その完成は『古事記』が元明天皇（四三代）、『日本書紀』は元正天皇（四四代）の御代であった。

元明も元正も女帝であるので、天皇の力が弱まった時代である。（元明は天智天皇（三九代）の娘、元正はそのまた娘）

天武天皇は壬申の乱（六七二）に勝利して天皇に即位した。

その時、天皇はすべての軍事権を子の高市皇子（後の太政大臣）に任せたが、皇子の母方は宗像氏である。宗像氏は大国主命の子孫であり、三輪氏の同族である。

三輪氏・賀茂氏も天武軍に加勢して加わり、大いに勝利に貢献している。三輪氏はこの軍功のおかげで、朝臣五二氏の筆頭に書かれている。

また『日本書紀』は「出雲神の事代主命が、天武天皇の軍を守護し、勝利に導いた」と記している。

これらのことから、『記紀』編さんの時代は、出雲氏族の力が強く、『記紀』編さんに大きな影響を持っていたと推理することができる。

## 天皇に無礼な出雲国造の祝詞奏上

---

出雲国造が新しく就任すると、天皇の前で『出雲国造神賀詞（かんよごと）』という祝詞を奏上する。

その内容は「出雲の大国主命が、皇孫ニニギ尊に日本の国を譲った。」そして「天皇の宮の周囲を、出雲神大国主命とその子らの社で守る」である。

これではまるで天皇に「国を譲ってもらい、宮を守ってもらうことに感謝せよ」と言っているも同然である。

また『神賀詞』の中で「高天の神王である高御魂命・神魂命が、皇孫に国譲りをしようとした時、出雲臣の祖の天穗比命を遣わし、大国主命を媚び鎮めた」とある。

しかし、高天原の王と言えば天照大神であり、天穗比命も天照大神の子である。それなのに『神賀詞』に天照大神の名がまったく出てこない。

出雲にとって天照大神は、国を取り上げた仇だったからである。

『神賀詞』の最初の奏上（七一六）は、元正天皇（四四代）に対してであったが、その四年前に『古事記』が完成し、四年後に『日本書紀』が完成している。

したがって、同時代に編さんされた『記紀』は、『神賀詞』と同じコンセプト（天照大神を敵視）で書かれたと考えられる。

以上に述べてきたように、『記紀』は天皇家の正統性など、ひと言も主張していないのである。

## 伊勢神宮は存在してはならない

---

『古事記』は出雲神を祀る大神神社（桜井市）・出雲大社の創建を大々的に書いているが、皇祖神を祀る伊勢神宮創建についてはひと言もない。本当にひと言もない。

『日本書紀』には簡単に書かれているが、出雲神の神社とのアンバランスは際立っている。

伊勢神宮の御神体は、天照大神から伝わったとされる八咫鏡であり、大神はこれをわが子に手渡す時、次のように言っている。

「この鏡は我が御魂として、吾が前をいつくが如く、いつき奉れ」（古事記）

「吾がみこ、この宝鏡を視まさむこと、吾を視るがごとくすべし、ともに床を同じくし、殿を共にして、齋鏡となすべし」（日本書紀一書）

この鏡をヤマトから遠く離れた伊勢に置いたことは、大神の意に背く重大な神勅違反である。

最初は神勅に従い宮中に祀られていたが、「（一〇代崇神天皇は）神の勢いを畏れて、共に住みたまふに安からず。（日本書紀）」として笠縫村に祀った。（三世紀前半）

それが桜井市三輪の檜原神社だと言われている。しかし、その檜原神社は『延喜式（九二七）』の神名帳に載る式内社ではない。（式内社は大和朝廷の保護・援助を受ける）式内社ではないということは、つまり、朝廷が重視する神社ではないということである。

次に十一代天皇（三世紀後半）が即位すると、鏡を皇女倭姫に託し、祀るに相応しい場所を探させた。

倭姫が鏡を保持し、近江・美濃を経て伊勢に至った時、天照大神が「この神風の伊勢国は、常世の波がしきりに寄せる国、遠国の美しい国なり。この国に居たいと思う。」と言われた。それで「社を伊勢国に立て、齋宮を五十鈴川の上流に興した」と、『日本書紀』は記す。

これに対して『古事記』は、伊勢神宮の創建にはひと言も触れていない。十一代天皇の皇女倭姫ではなく、「一〇代天皇の皇女トヨスキ姫は伊勢大神の宮をいつき祭った」と、『日本書紀』と矛盾することを書いているだけである。

古代において神祭りは、国家の最大の行事のひとつであるはず。それなのに皇祖祭祀（伊勢神宮創建）について『古事記』がまったく触れないというのは異常なことである。しかも、出雲神を祀る大神神社・出雲大社の創建は字数を尽くして書いているのにである。

## 天皇は誰も伊勢神宮を訪れなかった

---

六九二年、女帝持統天皇（四一代）は三月三日に伊勢に行幸すると詔を発したが、これに対して三輪氏の高市麿が強硬に反対した。

三輪高市麿とは出雲神大国主の子孫、三輪氏の氏上で壬申の乱（六七二）に軍功を立て、臣下の最高位である朝臣五二氏の筆頭の重臣であった。大国主命を祀る大和一の宮大神神社の社家でもある。

このために持統天皇は三日の出立は諦めたが、それでも反対を押し切り、三日遅れて六日に伊勢に向かった。道中の神郡（三重県度会郡・多気郡）、伊賀、伊勢、志摩の国造らに冠位を授け、懲役を免じた。そして二〇日には御所に帰還している。

およそ二週間の旅であったが、三重県志摩市阿児町に仮宮を建てて滞在している。その場所は不明だが、志摩国府の在った阿児町国府付近であると思われる。

しかし、ここに到るには道中に伊勢神宮が在ったはずだが、なぜか伊勢行幸を記す『日本書紀』にも、伊勢神宮にも、天皇が神宮に立ち寄ったという記録が残っていない。

さらに、それから約五〇年後の七四〇年、聖武天皇（四四代）は伊勢国の関宮（三重県津市白山町川口）に一〇日間滞在した。

そこから伊勢神宮までの距離は、わずかに四〇kmしかないが、それでも天皇は到着の翌日に使者を派遣しただけで、自身で神宮を訪れることはしなかった。

持統天皇（四一代）も聖武天皇（四四代）も、まるで伊勢神宮を避けていたかのようである。

伊勢神宮創建（日本書紀）から一六〇〇年も後に、ようやく天皇が初めて伊勢神宮を訪れた。

明治二年（一八六九）三月のことであった。この月二八日に行われた東京遷都に先立ち、明治天皇が十二日に外宮、続いて内宮を親拝された。この後も明治五年、十三年、三八年と計四度訪れている。

大正天皇は病弱であったために大正四年（一九一五）に一度だけだが、その代わり皇太子、後の昭和天皇が大正四年、五年、八年、十年に二度、十三年と六度、即位後には昭和三年、四年、十七年、二〇年、二七年、二九年、三七年、四六年、四九年、五〇年、五五年と御拝されている。

昭和天皇が皇太子時代も含めて二〇回近くも訪れているので、天皇は伊勢神宮に親拝するものという思い込みが誰にでもあるが、明治時代前には誰一人として一度も訪れていないのである。

天照大神が「傍から離してはならない」と命じた鏡を遠国の伊勢に祀り、しかも天皇は一六〇〇年もの間、誰も伊勢神宮を訪れていない。ここに日本の建国史の鍵が隠されている。

天皇が誰一人も伊勢神宮を訪れなかった事実を指摘すると、「宮中で祀られているから構わない」という反論が返ってくることもある。

しかし、一〇代崇神天皇は「神の勢いを畏れて、共に住みたまふに安からず。（日本書紀）」と言って、天照大神の祭祀を宮中から外に出したのである。

しかも『延喜式（九二七）』に載る宮中三六神の中に、出雲神の事代主の名前はあっても、天照大神の名は無い。宮中の賢所に祀られたのは後世のことである。

明らかに天照大神の祭祀は、大和朝廷によって蔑ろにされていた。

それは『古語拾遺（八〇七）』の次の一文からも知ることができる。

「天照大神は祖・宗であって、尊きこと並びなく、他の諸神は子・臣にして、いずれも比較することはできない。それなのに今、神祇官が天照大神を祀るのが後回しにされている。」

すでに、九世紀の初め（六〇代醍醐天皇の御代）には、天照大神の祭祀が諸神の後回しにされていた、と書かれている。

伊勢神宮に仕える皇女を斎王と言い、「天皇が位に就けば、伊勢の大神宮の斎王を定めよ。」と『延喜式』に記されている。

しかし、同様に「賀茂大神の斎王を定めよ。」ともある。賀茂大神とは山城一の宮の賀茂大社をいう。その賀茂大社の社家には二説があるが、ひとつは大国主命の子孫の賀茂氏（三輪氏の同族）である。

そして、賀茂の斎王は伊勢の斎王よりも上位の者がその任に就いた。ここでも皇祖神よりも出雲神が重要視されている。

皇祖天照大神は宮中に祀られず、祭祀が諸神の後回しにされ、斎王も賀茂神のよりも格下であった。これが紛れもない事実である。

## 天照大神が最高神に決まったのは明治時代

---

このように天照大神の祭祀が冷遇されていた証拠は幾つもある。

それなのに、ほとんどの日本人が、古代から天照大神の祭祀こそが、国家最大の祭事であったかのように思い違いをしている。

それは古代の大和朝廷ではなく、近代の明治政府が決定したことに過ぎなかった。

長い間判読できなくなっていた『古事記』を解読したのは、江戸時代の国学者本居宣長（一八〇一没）であった。

その宣長の死後、養子の本居太平に弟子入りした平田篤胤（一八四三没）が興した平田神学は、幕末の勤王の志士たちに大きな影響を与えたが、篤胤が重視した神は、天照大神ではなく出雲神の大国主命であった。

これは『古事記』を忠実に読めば、誰でもその結論に至らざるを得ない。

ところが、明治新政府は神道の最高神を決定するにあたり、二大派閥の薩摩が造化三神（天御中主神・高魂神・神魂神）を推し、長州は天照大神を推していた。一時、長州派が神祇官を独占し平田神学派を一掃したが、その後に、薩摩派が長州派を追い出し主導権を握った。しかし、薩摩派は西郷隆盛の失脚（一八七三）とともに、その力を失ってしまった。

こうして長州派（伊勢派）は力を盛り返したが、今度は出雲大社を中心とした出雲派が台頭してきた。

出雲派の中心人物である出雲国造家の千家尊福は、著書の『神道要章』に次のように述べている。

「国土に生ずる万物は、大国主大神のお造りになった国土に生じるものであって、例え、太陽（天照大神）の光を受けても、土地を離れては生じることはできない。（中略）

天神（天照大神）を崇敬するにしても、まず（大国主大神のお造りになった）大地の恩に感謝すべきである。」

『記紀』と全国の神社のほとんどが出雲神を重視している以上、論争になれば、伊勢派がだんだんと窮地に追い込まれてしまうのは当然の結果であった。

しかし、伊勢派はより権力に近いところに居た。長州の山田顕義（松下村塾出身 初代司法大臣）に働きかけ、明治一四年（一八八一年）に、「宮中に祭られる神は天照大神」という明治天皇の勅裁を得ることに成功した。

これによって最高神争いは決着し、出雲派の敗北が決定した。

このように神道の最高神が天照大神に決まったのは、政治の力であった。

西郷隆盛が失脚していなければ、あるいは勅裁が下りなければ、代わりに造化三神、あるいは

大国主命がその地位を占めていた。天照大神はまったく偶然の産物であった。

『記紀』は皇祖神を讃えず、出雲神を讃え、全国の大社・古社は皇祖神ではなく、出雲神を祀っている。そのような状況下で、天照大神が最高神になったことは奇跡に近いことでもあった。

## 伊勢は太陽信仰の聖地ではない

---

最近のスピリチュアル（心霊）ブームに乗り「伊勢は聖地なので、神宮が建てられた」という意見があるが、伊勢の民話・地名・人名・遺跡・神社・古文書等には聖地を指し示す片鱗さえも存在していない。

また聖地ならば神話に登場しそうなものだが、伊勢は神話の舞台にはなっていない。

内宮の鎮座地は、北を除く東西南の三方を山に囲まれた、これ以上の所はないと言うほどの日当たりの悪い場所である。

冬至の太陽が宇治橋の向こうから昇ることを重要視する人もいるが、五十鈴川のように南北に流れる川に橋を架ければ、全国どこでも橋の向こう（東）から日が昇るのは当たり前の話である。

それに明治二〇年（一八八七）以前までは、宇治橋は対岸に数十軒の民家が立ち並んでいて神域外にある橋であった。

ヤマトから見て伊勢は太陽の昇る位置にあるので神宮を建てたという意見もあるが、そのヤマトに東の方角や日の出を拝む風習は無い。それに鏡を祀るに相応しい場所を求めてヤマトを発った倭姫は、東ではなくまず北の近江、美濃地方へ行っている。

さらに平城京、平安京と北方に遷都した時に、なぜ神宮もその場所を北に変えなかったのか、辻褄が合わない。

伊勢国の枕詞も「神風の」であって、「日が昇る」ではない。

伊勢は聖地であるという形跡はまったく無い。ただ神宮が立っているだけ。それを聖地の根拠にしては循環論になってしまう。

スピリチュアルは疑似宗教であるが歴史ではない。

## 天照大神は太陽神ではない

---

『延喜式（九二七）』によれば、伊勢神宮の祭事は正月元旦、二月の祈年祭、四月・九月の神衣祭、六月の月次祭、九月の神嘗祭であり、日（太陽）を祀る祭りも儀式も何もない。

天照大神を日神だとしているのは『日本書紀』で、『古事記』は言っていない。ただ一ヶ所だけ、神武天皇が熊野へ迂回する時に「われは日神の御子にして、日に向かいて戦うこと良からず。」とある。

これは後から付け足したように思える。なぜなら東征自体が、西の九州から東のヤマトへと、日に向かって進んだからである。

『日本書紀』は天照大神の誕生を「（イザナギ・イザナミ尊が）天下の主たる者を生もうと言って日神を生んだ。大ヒルメ貴と言う。この子は光が麗しく、国中に照らし通す。多くの子を生んだが、未だにこのような霊異な子はいない。」と記す。

前に『記紀』は天照大神の誕生を讃えていないと書いたのと矛盾するようだが、天照大神誕生の前には、海・川・山・木の祖・草の祖が生まれ、後には月神が生まれている。その月神を「光麗しきは日に継げり、日に並びて知らすべし」とあるので、『古事記』の三貴子と同様に天照大神だけを讃えているのではない。

天照大神が太陽神なら、太陽が誕生する前に海・川・山・木・草が生まれたというのは矛盾する。さらにその前には淡路島・本州・四国・九州・隠岐島・佐渡島なども誕生している。

「天照」や「日」という名を太陽神の根拠にすることもできない。

なぜなら天照大神という呼び名は8世紀の奈良時代頃に付けられたものであり、大神の孫の火明命も天照国照彦と同じように呼ばれている。

「日」が付く神名もこれだけもある。

- |               |               |                 |
|---------------|---------------|-----------------|
| ①大綾津日神（災厄の神）  | ②大直日神（災厄の神）   | ③大戸日別神（戸の神）     |
| ④大禍津日神（穢れの神）  | ⑤天忍日命（高木神の子）  | ⑥天日榊（半島から来た神）   |
| ⑦天日別（外宮度会氏の祖） | ⑧天日鷲（外宮度会氏の祖） | ⑨天穗日命（天照大神の子）   |
| ⑩天日鳥（天穗日命の子）  | ⑪向日神（スサノオの孫）  | ⑫宇都志日金折（安曇氏の祖）  |
| ⑬神直日神（穢れの神）   | ⑭甕速日神（剣の神）    | ⑮饒速日命（天照大神の孫）など |

## 伊勢神宮は東方進出の基地ではない

---

さすがに古代史の専門家が、伊勢を聖地だと言っているのは寡聞にして聞かない。しかし、その代わり彼らは神宮は東方進出のための基地であったと言う。

そうとでも言うしか他にあるまいが、これも次の『日本書紀』の一文で否定される。

「（日本武尊は）枉道りて伊勢神宮を拝みたまふ」

「枉道（よぎ）り」は「まがる・まげて・まげる」という意味から、寄り道して、伊勢神宮を訪れたと書かれている。

この時、日本武尊は父の景行天皇（十二代 四世紀）から東国の賊の征討を命じられ、東に赴く前に伊勢神宮に立ち寄ったのであるが、それを『日本書紀』は寄り道と書いている。つまり、伊勢神宮は東方進出のための基地ではなかったということになる。

それに、神宮へ行くにはその手前を流れる宮川と勢田川を渡らなければならないが、この二つの川は、少しまとまった雨が降ると、幾度となく洪水を繰り返してきた。（昭和五七年にも勢田川が氾濫した）

雨天に近づけない所に、誰も基地は造らない。

伊勢神宮は聖地でもなければ、基地でもなかった。

ではなぜ伊勢に建てられたのか。その理由は「容易に近づけさせない」にあった。

## 出雲神を祀られねば殺される

---

伊勢市の街は外宮の門前町として栄えた。内宮の門前町ではない。

その民家は全国でも珍しい妻入り造りである。これは出雲大社の造りであり、新潟県の出雲崎の民家も同じである。

内宮を流れる五十鈴川河口（伊勢市二見町）の右岸を松下という。ここに『蘇民将来』伝説が伝わっている。

その荒筋は次の通りである。

「ある所でスサノオ命が宿を求めたところ、蘇民将来という者だけが宿を貸した。

そこで怒ったスサノオ命は、蘇民将来とその家族だけに茅の輪を付けさせ、それを目印にして、その他の者を皆殺しにした。」

昔は松阪市を流れる櫛田川（旧磯部河）以東を神郡と呼んでいた。その郡長は外宮の神官度会氏である。

この神郡（伊勢市・松阪市・多気郡・度会郡）では、現在も「蘇民将来子孫家」の札を付けた注連飾りを、一年中玄関に飾る風習が続いている。

つまり、天照大神を祀る神宮のお膝元の民家は、天照大神ではなく「出雲神を大切にします」という標しを掲げているのである。

この説話は伊勢だけではなく、全国に広く伝わっている。『備後風土記』にも記載されており、京都三大祭りの祇園祭も、八坂神社に祀られているスサノオと蘇民将来に因んだ祭事である。

五十鈴川河口の二見町には、外宮の度会氏が居た（延喜式）ことから、この説話は外宮が広めたと考えられる。そして外宮の祭神の豊受神はその出雲神スサノオの子である。

つまり『蘇民将来伝説』は内宮を祀るな、外宮を祀れということを示唆している。

『古事記（七一）』は、一〇代と十一代天皇記（三世紀）に、字数の限りを尽くして大神神社（奈良県桜井市三輪）と出雲大社の創建談を載せているが、伊勢神宮創建については一字も無い。

一方で『日本書紀（七二〇）』は、十一代天皇の皇女倭姫が近江・美濃を巡って伊勢に来た時に、天照大神が「この国に居たいと思う」と言われたので「社を伊勢国に立て、斎宮を五十鈴川上に建てた」とだけ記している。

その年代であるが、『記紀』は古代天皇の年齢を百数十歳まで引き延ばしているのので、それ（皇紀）で行くと、伊勢神宮の創建は紀元前後ということになってしまう。しかし、それは現実的ではない。

『古事記』の一〇代天皇崩御年の干支は戊寅と記されている。戊寅は一九八・二五八・三一八

年などであるが、『日本書紀』の一〇代天皇紀に、箸墓古墳（三世紀半）の記事が出ているので二五八年であったと考えられる。

そうすると伊勢神宮が創建されたという十一代天皇期は三世紀後半ということになる。

## 四百年も放っておかれた伊勢神宮建設

---

前に持統天皇（四一代）が伊勢行幸をした時（六九二）に、伊勢神宮を訪れていないと書いたが、その四年後（六九六）に詠まれた天照大神遙拝の歌にも、伊勢神宮が出てこない。

「度会の 齋宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を ……（柿本人麻呂）」

これは大海人皇子（後の四〇代天武天皇）が伊勢国朝明郡（四日市）から、伊勢（度会）の方向に向かい、天照大神（鏡）を遙拝した様子を詠った歌であるが、この中で鏡の在る所を神宮ではなく齋宮と詠んでいる。

もしこの時神宮が存在していれば、当然齋宮ではなく神宮と詠んだはずである。

『日本書紀』は十一代天皇の御代（三世後半）に伊勢神宮が建てられたと書いているが、持統天皇の伊勢行幸（六九二）とこの歌（六九六）から、この時点では、伊勢神宮はまだ存在していなかったと考えられる。

文武天皇紀（四二代 在位六九七―七〇七）から、伊勢神宮に関する、それも具体的な記事が急に増えてくる。（『続日本紀』） それまでの『日本書紀』の伊勢神宮に関する記事と比べると圧倒的に多い。

伊勢神宮は、本当は文武元年（六九七）以降に立てられたと思われる。

そうすると『古事記』が編さんされた七一二年頃は、まだ伊勢神宮が造られてからそれ程時が経っていなかったもので、さすがに、ずっと昔（三世）に造られたという見え透いた嘘を書くことができなかつたのではないだろうか。

それから八年後に『日本書紀』が編さんされた時は、十一代天皇の御代に立てたと書くことはできたが、それでも五十鈴川上流に昔から在ったとは書くことができなかつたので「社を伊勢国に立て」と場所を特定しなかつたと想像する。

では、嘘を書くにしても、なぜ十一代天皇記に持ってきたのか。それは十一代天皇の御代に造られた出雲大社とのバランスを取るためであったと思われる。

それにしても、大神神社（一〇代天皇の御代）よりも遅れて造られたことには変わりがない。

## 内宮よりも外宮を先に祭る

---

伊勢神宮とは、内宮（皇大神宮）と豊受大神宮（外宮）の二大宮を含む別宮・摂社・末社の一二五社の総称である。

その創建は内宮が先で、外宮が後であるが、祭事はすべて外宮を優先して行われる。

明治二年（一八六九）三月、明治天皇が伊勢神宮を訪れた際も、午前中に外宮を参拝、次に午後に内宮を参拝された。大正天皇、昭和天皇も同じである。

この順は古式の定めによる。

『延喜式（九二七）』に記載されている伊勢神宮の祭事（元旦・祈年・神衣祭・月次祭・新嘗祭）について、「先づ度会宮（外宮）を拝し、次に大神宮（内宮）、次に諸宮（別宮）」と規定されている。

この「外宮先祭」を以て、外宮が内宮よりも上位にあったと言える。

しかし、それを指摘すると、「上位の神は後から祀る」という意見が返ってくることもあるが、それでは諸宮（別宮）が内宮・外宮よりも上であることになってしまう。

## 外宮の鎮座記はウソを書いている

---

外宮の鎮座については『古事記』『日本書紀』に記載がない。

外宮に伝わる『止由気宮儀式帳（八〇四）』には次のように記されている。

「雄略天皇（二一代）の夢に天照大神が現れ、『一所に居ると、大変苦しい。それだけではなく食事でも安心して食べることができない。丹波国比治の真奈井に坐す我が御饌都神、等由気大神を我がもとに呼んでもらいたい』と言われた。

そこで丹波国から勧請し、度会（伊勢市）に宮を定め、天照大神の朝・夕の食事を毎日差し上げた。」

これには天照大神の教えにより、食事を差し上げる神として、丹波から呼ばれたとある。

雄略天皇（二一代）は五世紀であるから、『日本書紀』の内宮を建てたという垂仁天皇（十一代）の三世紀よりも二百年も後である。

それよりも、実際に内宮が造られたと思われる文武天皇（四二代）の御代よりも前になってしまう。

一方で『丹後風土記』には次のように記されている。

「丹後国丹波郡の郡家の西北の隅の方に比治里あり。

里の比治山の頂に井あり。その名を真井と云う。

この井に天女八人が舞い降りて水浴びをしていたところ、

老夫婦に見つかり、その衣を隠されたため一人が逃げ遅れた。」

「それが竹野郡の奈具社に坐す豊宇賀能賣命である。」

丹波と丹後の違いがあるが、丹後国は七一三年に加佐・与佐・丹波・竹野・熊野の五郡を割いて分国された元丹波国である。したがって、『止由気宮儀式帳』が比治を丹後国ではなく、丹波国と記しているのは古伝をそのまま伝えていることになる。

その比治里とは豊受大神を祀る式内社の比治（沼）麻奈為神社（京都府京丹後市峰山町久次）の辺り、竹野郡の奈具社は豊宇賀能賣神を祀る式内奈具神社（京丹後市弥栄町船木）を言う。

「受」と「宇賀（うか）」は転訛し易いので、豊受大神と豊宇賀能賣は同じ神である。

式内伊和都比売神社（兵庫県赤穂市）でも、「伊和都比売は外宮の豊受比売」、式内恩智神社（大阪府八尾市）でも「大御食津姫は外宮の豊受姫である」と言われているので、豊受大神は女神であり、『丹後風土記』の言う天女と符合する。

この丹後国に式内社は六三社あり、そのうち豊受神を祀るのは七社、豊宇賀能賣は六社である。約二割が豊受（豊宇賀）神を祀っていることになるが、このほかウケモチ（保食）神の名では五社ある。まさに丹後は外宮の故郷と言うに相応しい。

しかし、雄略天皇（在位四五六―四七九）の御代（五世紀）に外宮が建てられたというのは疑わしい。

なぜなら神域の高倉山（一一七m 別名日鷲山）の頂に六世紀の円墳が在るからである。死を忌む神社が、しかも正殿を見下ろす位置に古墳を造らせるはずがない。したがって実際に外宮が鎮座したのは、これ以後であったと思われる。

神社が死を忌んだことは『延喜式』に、「神社の四至の内に、死人を埋蔵することを得ざれ。」と記されている。

外宮の本当の鎮座は、『続日本紀』に「多気大神宮を度会郡に遷した」とある文武二年（六九八）である。多気大神宮とは三重県多気郡多気町にある式内佐那神社のことを言う。祭神は岩戸から天照大神を引き出した手力男命と、出雲大社を建てたという曙立王である。

## 伊勢神宮の奇妙な祭神たち

---

外宮の祭神は、『延喜式（九二七）』によれば豊受大神を含めて四柱である。

豊受（豊宇賀）神の別名はウカノミタマと言うが、ウカノミタマは出雲神スサノオの子である。「ミタマ」は御魂と書き神のことである。「ノ」は助詞なので、結局ウカの神という意味であるが、そのウカは出雲大社の東の口・奥宇賀の神ではないかと思われる。

『古事記』でも、スサノオが子の大国主命に「宇迦山の麓に居れ」と言っているので、ウカノミタマ（豊受大神）とは、出雲大社の大国主命のことかも知れない。

京都の伏見稻荷神社も、このウカノミタマが祀られている。

豊受以外の他の祭神三柱の名前は伝わっておらず、まったくの不明である。これはどういうことであろうか。

地方の一小社の祭神が不明だというのはよく聞く話であるが、伊勢神宮の祭神が判らないというのは尋常なことではない。

その三神をニニギ尊・天児屋根命・太玉命だとする説もあるが、これは鎌倉時代に書かれた『神道五部書』によるもので、後世の推測である。

『延喜式』などに載る装束から、三神も女神だとも言われている。

内宮の祭神は天照大神・手力男命・タクハタ姫の三柱である。

天照大神は言わずと知れた皇室の祖であるが、手力男命は、天照大神が天岩戸に隠れた時に岩戸の扉を開け、大神の手をつかんで引き出した者であり、タクハタ姫は大神の孫ニニギ尊の母親である。これもまったく奇妙な取り合わせである。

もし、どうしても天照大神以外に二柱の神を祀るならば、国生みをした両親のイザナギ・イザナミ尊か、あるいは天孫降臨をした皇孫ニニギ尊と東征をした初代天皇の神武しか他には考えられない。

岩戸を開けた者と皇孫の母親を、天照大神と共に祀らねばならない理由などはどこにもない。伊勢神宮は神話の準主役を祀らず、脇役と正体不明者を祀っているのである。

伊勢神宮は内宮・外宮の二大宮を含む一二五社の総称である。いちおうイザナギ・イザナミ尊は別宮に祀られているが、ニニギ尊と神武天皇はどこにも祀られていない。

もう一人の皇祖神と言われる高木神も祀られていない。

内宮の禰宜は中臣氏が務めたが、その祖の天児屋根命も祀られていない。

ただ外宮に出雲神だけはしっかりと祀られ、内宮には重要ではない二神が祀られている。

いったい誰が、伊勢神宮の祭神を決めたのであろうか。

神話上において、手力男命とタクハタ姫は接点はないが、九州の壱岐島の一の宮である天手長男神社・天手長比賣神社（二社とも名神大社）の祭神である。壱岐は「一支」とも表記され

るが、外宮の前の地名は同じ一志町・一之木である。内宮の祭神の影には外宮が存在する。

## 外宮の度会氏が北陸遠征

---

外宮の度会氏は、通説では伊勢の地方氏族と言われている。

ところが、『豊受太神宮禰宜補任次第』という古文書に、度会氏の祖の大若子という者が、十一代天皇（三世紀）の命により、越国（北陸）の凶賊を征討した、と記されている。

しかし、はたして伊勢の一地方氏族が、広大な越（越前・越中・越後）へ遠征する力を有していたであろうか、大いに疑問である。それに道中に居た大豪族尾張氏には、なぜ命じられなかったのであろうか。

大若子はこの遠征の成功により、天皇から大幡主の名を授かっている。

その大幡主を祭神とする式内社が、石川県金沢市（御馬神社）と新潟県佐渡市（大幡神社）に存在している。

このほかに博多祇園山笠で有名な櫛田神社（福岡市）にも祀られている。

度会氏は旧姓を磯部氏と言ったが、その名と同じ式内石部（磯部）神社が、越国の新潟県に三社、富山県に一社、石川県に三社、福井県に一社の計八社ある。祭神は大国主命の子である。

石部神社は、その他の地域では外宮の故郷の丹波国（但馬を含む）に六社と、近江国に四社しかない。

また磯部の地名も県庁所在地の富山市・金沢市と、氷見市の三ヶ所に見られる。

元外宮の佐那神社（三重県多気町）の祭神手力男命が、富山県立山町の雄山神社に祀られている。

これらのことから、外宮の度会氏が越国に遠征したというのは史実であったと考えられ、度会氏が単なる地方豪族以上の力を有していたとすることができる。

## 度会氏の正体は出雲氏族

---

度会氏はその祖を天日鷲命とする。

その天日鷲命を祭神とする東京台東区の鷲神社は「わし神社」ではなく「おお・とり神社」と読む。「おお（大）」は尊称なので、「鷲」を「とり（鳥）」と読んでいる。

それならば天日鷲命は天日鳥命とも書くことができるはずである。

その天日鳥命が『出雲国造神賀詞』に天穗比命の子の天夷鳥命として登場している。天穗比命は天照大神の子であるので、天日鳥命（天夷鳥命）は孫にあたる。

『新撰姓氏録（八一四）』の山城国神別の天孫の項に

「出雲臣 天穗日命の後なり。天日名鳥命の後なり。」とある。（「名」は助詞）

出雲臣とは出雲国造であり、出雲大社の宮司家でもある。

前に書いた、明治時代に伊勢派と最高神争いを演じた出雲派の千家尊福は、その子孫である。

京都の北野天満宮と九州の太宰府天満宮の摂社に、度会氏の祖の大若子が祀られているのは、度会氏が全国に天神信仰（菅原道真）を広めたからであった。その菅原道真も出雲臣の出身である。したがって度会氏は、出雲臣と祖を同じくすると考えられる。

出雲の四大大神とは、熊野大社のスサノオ神、出雲大社の大国主命、佐太神社の佐太大神、そして能義神社（安来市能義町）の天穗日命であるが、能義神社は熊野大社・出雲大社・佐太神社に比べると余りにも簡素な小さな社である。はたして本気で祀る気があるのかと疑いたくなるほどである。

天穗日命の子孫である出雲国造家（出雲大社宮司家）は、江戸時代でも藩主を上回るほどの権威を保持していた。明治時代でも千家尊福は中国・四国地方で「神」として崇められていた。布教先の愛媛県で彼が泊まった旅館の風呂の湯は、御神水として人々が競って徳利に入れて持ち帰ったと新聞に報道されている。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲 一九〇四没）も「出雲国造の方は、天子様に等しい尊信を受けていたのだ」と書き残している。

古代からこれほどの権威を保ってきた出雲国造家が、現代までも続けている「亀太夫神事」という屈辱的な神事が存在する。

毎年一〇月十五日に、出雲大社の宮司（国造）が、熊野大社を訪れ、祭事に使う臼と杵を借りる神事である。この時、熊野大社が対応するのは亀太夫という下級神官であり、その亀太夫が宮司に罵詈雑言を浴びせかける。これを宮司はひと言も反論せずに終わるまで黙って聞くという何とも不思議な神事である。

なぜこの様な神事が現代まで続いているのか。天皇に等しい権威を持っている宮司がひと言「

止める」と言えば、即座に廃止されたであろう。

考えられる理由は、国造家の千家は本当は天穗日命の子孫ではなく、古代のどこかで入れ替わった大国主命の子孫ではないかということである。

そして、この神事は大国主命の子孫が、天照大神の子孫を装う国造に対して行う「出雲国譲り」の復讐劇であると考えられる。

出雲国造家が大国主命の子孫であるのなら、天日鷲命を祖とする外宮の度会氏も大国主命の子孫である。

それならば、度会氏が遠征した能登の一の宮気多神宮に、大国主命が能登に遠征したという話を伝えていることも肯ける。

## 外宮は内宮への交通を遮断する関所

---

伊勢市は内宮ではなく、外宮の門前町として発展した。それで外宮は街の中心に在るが、内宮は外宮から5 kmも離れた奥地に鎮座している。

外宮から内宮に至るには現在三本の道があるが、御木本道路（県道32号線）は昭和二六年に開通し、御幸道路（県道37号線）はその名の通り、明治天皇の行幸のために明治一〇年に完成した道路である。

それ以前は古市町を通る細い道一本しか無かった。細いと言っても十六世紀に豊臣秀吉が拡張しているので、その前は本当に参宮街道と言えない程の隘路であった。

それも勢田川を渡った所に外宮神官度会氏の墓所があった。現在は妙見堂が建っている。川を渡り坂道を上がった所にあるので、外宮から内宮へ行く者は度会氏の墓所を仰ぎ見る形となる。

もし、ここで交通を遮断すれば誰も内宮へ行くことはできなくなる。

道ではなく五十鈴川をさかのぼって内宮へ行くことも出来るが、その河口には度会氏（旧姓磯部氏）が居た。そして、前に書いた出雲神を大切にせねば殺すという『蘇民将来伝説』を広めていた。支流（現在の本流）の河口には度会氏の祖の大若子を祀る神社がある。

こうしてみると、外宮の度会氏は内宮へ到る道を完全に支配していたとすることが出来る。

現在伊勢市を訪れる人は近鉄を利用する人が多い。その宇治山田駅の前に箕曲松原神社が在るが、この辺りは古くは箕曲郷と呼ばれる地域であった。箕曲と書いて「みの」と読むが、伊勢国とヤマトを結ぶ初瀬街道が通る三重県名張市箕曲中村は「みのわ」と読む。

そして愛知県豊橋市三ノ輪の地名から、外宮の前の箕曲郷は三ノ輪＝三輪郷であったと考えられる。

伊勢神宮の神官が位階を授かる時のしきたりが『延喜式（九二七）』に規定されている。それには「内宮では天照大神に拝礼した後に、北（平安京）の帝を拝め」とあるが、「外宮では西に向かって行え」とある。

外宮の西にあるのは大神神社あるいは出雲大社である。

## 出雲が外宮を建てた

---

三世紀末に行われた神功皇后の三韓征伐は、三輪氏が大いに活躍した。

『日本書紀』にも「兵を集めるために（九州に）三輪社を建てた」とある。あるいは三輪氏を中臣氏・物部氏・大伴氏と併せて四大夫と呼んでいる。

住吉大社（摂津一の宮）や粟鹿神社（但馬一の宮）の古文書にも、三韓征伐で三輪氏が活躍した様子が書かれている。

その三韓征伐は壱岐島・対馬を拠点に行われたが、壱岐の一の宮は天手長男神社・天手長比賣神社であり、祭神は手力男命とタクハタ姫であるが、この二柱は内宮の祭神でもある。（手力男命は元外宮の佐那神社祭神）

壱岐には月読神社もあり、天手長男神社・天手長比賣神社と共に格式の高い名神大社である。

壱岐は「一支国」とも表記されるが、外宮の前の地名も伊勢市一志町と一之木である。

また内宮の別宮に月読宮、外宮の別宮にも月夜見宮がある。

そして、京都の月読神社（名神大社）を祀った秦氏は、伏見稻荷社にウカノミタマを祀っている。ウカノミタマは外宮祭神の豊受大神の別名であり、出雲神スサノオの子である。

外宮の故郷の丹後一の宮籠神社祭神は天火明命であるが、『播磨風土記』は火明命を出雲神大国主命の子であると記している。そして播磨一の宮伊和（三輪）神社祭神の女の伊和比賣は、外宮の豊受比賣であると伝えている。

これまでの話を総合して考えると、外宮神官の度会氏とは三輪氏であり、外宮は内宮の天照大神祭祀を閉じ込めるために、出雲が建てた関所であると推定することができる。

## 全国の大社・古社は出雲神を祀る

「名神大社」とは律令制下の格式の高い神社であり、式内社の大社から選ばれ、国家の大事の解決を祈願する名神祭の対象となった。

式内社は『延喜式（九二七）』の神名帳に載る神社を言い、大社と小社に分けられる。

大和を中心とした主な一の宮		(祭 神)	(社 格)
大和一の宮	大神神社	(奈良県桜井市) 出雲神	名神大社
山城一の宮	賀茂大社	(京都府京都市) 伝出雲神	名神大社
丹波一の宮	出雲大神宮	(京都府亀岡市) 出雲神	名神大社
丹後一の宮	籠 神社	(京都府宮津市) 伝出雲神	名神大社
但馬一の宮	粟鹿神社	(兵庫県朝来市) 出雲神	名神大社
播磨一の宮	伊和神社	(兵庫県宍粟市) 出雲神	名神大社
近江一の宮	日枝神社	(滋賀県大津市) 出雲神	名神大社
尾張一の宮	真清田神社	(愛知県一宮市) 伝出雲神	名神大社
三河一の宮	砥鹿神社	(愛知県豊川市) 出雲神	式内小社
飛騨一の宮	水無神社	(岐阜県高山市) 出雲神	式内小社
遠江一の宮	小国神社	(静岡県森 町) 出雲神	式内小社
伊豆一の宮	三嶋大社	(静岡県三島市) 出雲神	名神大社
信濃一の宮	諏訪大社	(長野県諏訪市) 出雲神	名神大社
能登一の宮	気多大社	(石川県羽咋市) 出雲神	名神大社
越中一の宮	気多神社	(富山県高岡市) 出雲神	名神大社

「一の宮」は律令制下で、国司が一番最初に巡拝する神社をいう。各国に一社しかない。律令制は四〇代天武天皇朝（六七三―六八六年）頃に確定した。

『記紀』の編さんは天武天皇が命じたとされていることから、その内容はこれらの名神大社・一の宮の社伝や社家の影響を受けていると考えられる。

この中で社家が三輪（賀茂）氏だとはっきりしているのは、大和・山城・但馬・尾張一の宮などである。

丹後・尾張一の宮の祭神火明命を伝出雲神としているのは、『播磨風土記』に「火明命は大国主命の子」と記されていることによる。

山城一の宮の祭神は、丹後一の宮の極秘伝に「賀茂神と異名同神」と伝えることによる。

これらに比して、皇祖天照大神を祀っているのは伊勢神宮だけなのである。どの様な言い訳を用意しても、その差は歴然としている。

『延喜式』に記載されている宮中三六座の神の中にも、事代主命（大国主命の子）の名はあるが、天照大神の名はない。

また大和朝廷を開いたとされる初代天皇神武はどこにも祀られていない。生誕地に立つ狭野神社（宮崎県高原町）でさえ式外社である。

天孫降臨をしたとされる皇孫ニギ尊は、かろうじて霧島神宮に祀られているが式内小社である。天皇家の故郷日向国の一の宮はその霧島神宮を差し置いて、出雲神大国主命を祀る都農神社（宮崎県都農町）である。

さらに聖地中の聖地であるはずの高千穂の高千穂神社、岩戸神社も式外社である。

『記紀』が天照大神を讃えていないことと併せて考えれば、大和朝廷が皇室の祖を軽視していたことは間違いない。

そして、元伊勢の檜原神社（三輪）、狭野神社、高千穂神社、岩戸神社が式外社であるのにもかかわらず、たかが外宮の度会氏や三輪氏の、それも三世紀の祖が祀られている式内社がこれだけでもある。

したがって、神社そのものは出雲によって発明され、式内社の選定も出雲が行ったとしか考えられない。

度会氏の祖の大若子（大幡主）を祀る式内社

御馬神社	石川県金沢市
大幡神社	新潟県佐渡市

三輪氏の祖の大田田根子を祀る式内社

多太神社	奈良県御所市
鴨神社	大阪府八尾市
多太神社	兵庫県川西市
鴨大神御子神玉神社	茨城県桜川市
多他神社	兵庫県美方郡香美町
大川美良布神社	高知県香美市

神社の出現と同時に消滅したのが銅鐸であったが、銅鐸は飛騨人が先祖を祀るための祭器であった。

出雲の荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡に集められ捨てられた銅鐸は、飛騨人から取り上げたものだった。

銅鐸研究の第一人者の考古学者大場磐雄も、銅鐸は三輪氏・賀茂氏が祭祀したと間違えるほど、その関係は深い。

## 大量の弥生人など渡来していない

---

経済の世界では日本の資産を狙って、外国から好条件で経済評論家などに「日本はもうダメだ」という本の執筆依頼がもたらされる。

古代史も「日本人のルーツが支那や朝鮮にある」という類いの本が、あまり売れていないにも拘わらず、次から次へと出版され、書店の目立つところに平積みされている。

敗戦後の歴史界は、戦中の皇国史観の反動と公職追放を利用し、皇室蔑視論が花盛りとなった。敗戦の三年後に発表された江上波夫の『騎馬民族征服王朝説』がその代表であるが、他にも『神武架空説』『欠史八代説』『王朝交替説』などがある。これらの説が渡世のために、確たる証拠もなしに雨後の竹の子のように続出した。

日本人の先祖は紛れもなく縄文人であり、日本は単一民族国家である。

遺伝子学、病理学、言語学、考古学などの諸科学が、揃って大量の弥生人渡来を否定している。いまだに日本人の祖が支那人・朝鮮人と言っているのは、ただ一人歴史学だけである。

ミトコンドリア (mtDNA) の学者で「日本人 (弥生人) のルーツは支那」と言う者もいるが、mtDNAは母子間だけに遺伝するものなので、父系のルーツが解るはずがない。

これに対してY遺伝子は父子間で遺伝する。その研究からは「日本人は、支那大陸・朝鮮半島・東南アジアの人々と大きく異なっている。」ことが判明している。

日本人は母乳を通じて母子感染するATLウィルスを保有するが、大陸・半島人には見られない。これも大量の渡来人の存在を否定する。

比較言語学は、世界中の言語の自然や体などの基礎単語一〇〇語が、年の経過と共に変化する割合を算出している。それに依れば、千年で二六%、二千年で四四%が変化する。

つまり、二千年前の弥生時代に大陸や半島から大量の弥生人が渡来し、縄文人と入れ替わったのならば、今でも日本語の「顔・月・水・大きい」などの基礎語の五六%は、中国語や朝鮮語と共通でなければならない。しかし、実際は共通する単語は一%もない。

したがって、言語学は大量の弥生人の渡来を完全に否定している。

また考古学も渡来人の数を年平均で数十人と見積もっている。

日本人の先祖が支那人・朝鮮人というのは、歴史ではなく政治上の話である。

## 基調文化も教わっていない

---

教科書は「日本は中国・朝鮮から基調文化（鉄・漢字・稲）を教わった」と書いている。これも実に怪しげな話である。

日本列島には一万六千年前から縄文文明が発達していた。縄文土器は世界最古の土器であり、漆器も支那よりも二千年も古い九千年前から使用していた。もちろん世界最古である。

縄文どころか、その前の石器時代の三、四万年前の地層からも、世界最古の局部磨製石斧が出土している。

支那は黄河流域の文明に始まるが、その黄河の渡河地点は河南省西部の洛陽周辺に限られていた。その他の場所では断崖絶壁が高い所では百数十メートルもあり、渡河することができなかった。

そこで洛陽周辺に南から東南アジア系、西からトルコ系、北から北方の狩猟民族が集まり覇を競った。

古代王朝は、夏王朝—殷王朝—周王朝—秦王朝（紀元前二二一年）—漢王朝と交替したが、夏王朝は東南アジア系、殷王朝は東北アジアの狩猟民族、周王朝も万里の長城の南に居た種族であり、秦王朝も周王朝とルーツを同じくする。

こうして異民族同士の殺し合いが延々と続いた。

紀元二年に新王朝によって人口統計が行われ、五九五九万人を数えたが、二百年後には十分の一の五百万人に激減している。その殺し合いの凄まじさが想像できる。

この人口の空白を埋めるために、北方から狩猟民族が移住させられ、二八〇年には一六〇〇万人まで回復した。つまり、古代文明を形成したという漢民族は、ここで絶滅したと言ってもよいのである。現在の漢民族は、この時移住した北方民族をさらに八百年後に南に押しつけ、北から侵入してきた北方民族の子孫である。

戦いが日常化した中で、より殺傷力の高い青銅製や鉄製の武器が発達するのは当たり前話である。

また言語の違う異民族同士が交流するためには筆談用の象形文字が必要であった。それが漢字である。発達した武器や漢字を日本に伝えたからと言って、決して胸を張れる話ではない。

稲も陸稲は日本列島で六千年前から栽培されていた。これは朝鮮半島よりも三千年も早かった。

水稻が二千八百年前頃に揚子江流域から伝わったが、おそらく縄文人が渡海して持ち帰ったものである。稲の突然変異の遺伝子から、朝鮮半島からもたらされた可能性はゼロだと判明している。

さらに北九州に伝わった水稻が、瀬戸内・近畿地方まで達するのに数百年の年月を要している

。また水稻栽培が始まったからといって、陸稻が消えたわけでもなく、陸稻は室町時代まで作られ続けたのである。

## スメラ尊は飛騨で選出された

---

五〇〇〇年前頃は、東日本と西日本の人口比は三〇対一程度であったが、そこから気候が寒冷化し、四〇〇〇年前には五対一ほどになった。それが三〇〇〇年程前の弥生時代になると、東西の人口比が逆転した。これは遺跡の数から推定される。

寒冷化する以前は、飛騨地方のような高地が人の居住に適していた。実際に飛騨の高山市国府町だけでも、その縄文遺跡数は、奈良県と大阪府を足した数よりも多いのである。

支那の春秋戦国時代にあたる二五〇〇年前頃から、大陸や半島の異民族が日本列島を襲うようになった。

彼らは少人数で小舟に乗って日本海側の特に北九州、出雲、富山地方を襲った。富山地方に上陸した異民族は、神通川や荘川などをさかのぼり飛騨にまで侵入してきた。

鉄製の武器を持ち、狩猟民族なので人狩りをして人肉をも食べた。それで古代の日本人は、彼らを鉄棒を持ち人を喰らう「鬼」と恐れた。

飛騨の人々は彼らを発見次第、取り囲んで殺したが、やがてその侵略の規模が段々と大きくなってきた。

そこで飛騨の国がまとまって彼らと戦う必要性がでてきた。その時、リーダーとして選出されたのがスメラ尊であった。皆の意見が分かれた時、無私立場からその優先を決めるのが役目であった。

それから約四〇〇年後（紀元前一世紀頃）に、スメラ尊のイザナギ尊は日本列島を守るために、各地との連絡網を作った。それが神話では国生みに変えられている。当時、日本列島は数十の国に分かれていたが、飛騨と出雲が二大国であった。そこでイザナギ尊は出雲と協力体制を作るために、イザナミ尊を出雲から妻として迎えた。

その二人の間に生まれたのが、ヒルメ貴（天照大神）とスサノオ命の姉弟であった。（月読命は架空の人物）

イザナギ尊は娘のヒルメ貴に皇位を継がせ、息子のスサノオ命を出雲の支配者として派遣した。

その後に天照大神とスサノオ命の姉弟は、飛騨と出雲の関係を強化するために、天照大神の娘をスサノオ命の子の大国主命の妻に迎えさせた。ところが大国主命が父スサノオ命の猛反対を振り切り、妻を離縁してしまった。

この辺の経緯を神話は「ウケイ」と「試練」に変えている。

そうこうしている間に、北九州への異民族の侵略が激しさを増してきた。そこで天照大神は全国に呼びかけ、日本の国を統一して九州遠征を行おうとした。

しかし、スサノオ命の死後も、大国主命は叔母天照大神に協力しようとはしなかった。

それでやむなく出雲の統治権を大国主命から取り上げた。これを神話は、出雲の立場から「出雲国譲り」と言っている。

## 天照大神による日本列島防衛

---

青銅製の剣・矛・戈などが、二七〇〇年前頃に朝鮮半島から北九州にもたらされた。それまでの日本列島には、人を殺めるための武器は存在していなかった。

二三〇〇年前頃の吉武高木遺跡（福岡市）から出土した木棺の中に、これらの武器が副葬されていた。この頃から、殺傷痕のある人骨が多く出土するようになった。出土する武器もその数を増やしている。

しかし、それが二一〇〇年前頃（紀元前一世紀）に急速に収束している。環濠集落の環濠もその姿を消していった。つまり戦いが終わったのである。

この戦いが終わった時期が、皇孫ニニギ尊の天孫降臨の時期と重なる。

「天孫降臨」とは異民族平定のための九州遠征であったのである。

平定を終えたニニギ尊の孫の神武天皇がヤマトに帰還しようとしたが、世代が代わっていたために、ヤマトの留守役の子孫たちと戦闘が起きてしまった。

そこで、神武天皇は飛騨の人々が大量移住していた伊勢湾岸から、援軍を募るために熊野へ迂回したのであった。

そして、最後には共に天照大神から伝わる神宝を見せ合い、同族であることが判ったので、ヤマトに入ることができた。

こうして日本列島最大の危機は、皇室の祖の尽力によって救われた。

それがために、その子孫のスメラ尊は人々から敬愛され、その宮には堀や塀などの防御施設を造る必要もなかった。そしてスメラ尊は直轄の軍を持つこともなかったのであった。

## 高天原は飛驒であった

---

出雲はこの日本列島防衛の大事業に協力しなかった。それがために大国主命は、叔母の天照大神から出雲の統治権を取り上げられたのであるが、大国主命の子孫がこれを逆恨みし、出雲神信仰という神社神道を全国に広めた。（二、三世紀）

キリスト教も四世紀の初めにローマ帝国に公認されたが、この頃、世界的な気候不順で人心が乱れた。出雲神信仰もその人々の不安に乗じて大流行し、そして、ついに大和朝廷内の権力を握るに到ったのであった。

そして、権力を握り続け、八世紀に『古事記』『日本書紀』を編さんした。

その編さんで飛驒が高天原であったことが隠され、「出雲国統治権取り上げ」を「出雲国譲り」、「九州遠征」を「天孫降臨」、「ヤマト帰還」を「神武東征」という神話に変えられてしまった。

したがって『記紀』にはその証拠が無いのであるが、『古事記』に、大国主命が離縁した天照大神の長女の子供二人が、出雲から高天原に昇ろうとして、その途中で諦めた場所を、美濃国の藍見河（長良川）の河上の喪山とある。それが岐阜県美濃市大矢田の喪山のことであり、ここは美濃から飛驒に到る飛驒街道の入口に位置する。

これが唯一、飛驒高天原を示唆している。

神武天皇はヤマトに帰還すると、報告のためにまず使者を飛驒に送った。

その返答として飛驒の位山の木板に「スメラ尊に任ずる」と書いたものが送られた。

それ以後、現代に至るまで天皇の即位式には、位山の一位の木で謹製された笏が使用されている。

位山には天照大神を初め、歴代スメラ尊（天照大神より二〇代ほど前から）がイワクラの下に埋葬されているからであった。

## 地名に残る歴史の痕跡

---

スメラ尊はその誕生の時から権力を持っていなかった。

天照大神も実際の政治は高木命に任せていたが、その高木命が居たと高田神社（飛騨市古川町太江）に伝わっている。

高木命は別名を高魂命という。この地から高木一族が皇孫ニニギ命を守って九州へ遠征したのであった。

その道中と九州の主要地に一族を配し、そこに「高木・高田・高家」の地名をつけた。

高田神社のある古川町太江は古くは高家郷と言ったが、この「高家」とは高木命の家が転訛したものである。

「高家」という地名がヤマトと九州にもある。

高木一族が九州に上陸した所は、大分県豊後高田市と宇佐市高家であった。そして、神武天皇が九州を発った地も高家（福岡県遠賀郡遠賀町別所）であり、ヤマトの橿原宮の隣も奈良県桜井市高家である。

つまり、「天孫降臨」と「神武東征」は高家（飛騨市）に始まり、高家（宇佐市・遠賀町）を経て、高家（桜井市）に終わったとすることができる。

「高家郷」は飛騨から九州を目指し西に進むと、関ヶ原の手前にもあった。現在の岐阜県大垣市高屋町辺りだと思われる。ここから西の不破郡と養老郡には高木姓、三輪姓がもっとも多い。

この高木と高田の地名はどこにでも在りそうであるが、密集して在るのは全国で四ヶ所しかない。それは富山湾・伊勢湾・有明海・瀬戸内海沿岸だけである。

富山湾・伊勢湾は飛騨の人々が寒冷化に伴い移住したところであり、瀬戸内海沿岸は九州遠征・ヤマト帰還の道中、有明海沿岸は九州を支配するのに必要なところである。

これらは飛騨が高天原であったことの傍証と言える。

### 富山湾沿岸

富山県 小矢部市高木、小矢部市高木出  
富山市高木・高木西・高木東・高木南、富山市高田  
射水市高木・南高木・北高木・西高木  
南砺市高儀

### 伊勢湾沿岸

三重県 伊勢市二見町高城、松阪市高木町  
岐阜県 岐阜市高田、山県市高木、養老郡養老町高田、海津市平田町高田  
愛知県 田原市高木、丹羽郡扶桑町高木  
一宮市萩原町高木、一宮市島村高木、一宮市大毛高木、一宮市多加木

## 有明海沿岸

- 長崎県 旧高来郡
- 佐賀市 高木町、高木瀬町高木
- 福岡県 みやま市高田町
- 熊本県 上益城郡御船町高木、肥後高田

## 瀬戸内海沿岸

- 兵庫県 尼崎市高田町、西宮市高木西町・高木東町、姫路市花田町高木
- 岡山市 北区上高田・下高田
- 広島県 府中市高木町
- 香川県 高松市亀田町高田
- 愛媛県 四国中央市上分町高木、新居浜市高木町、新居浜市高田  
西条市高田、松山市高木町

高木・高田の地名は、「高い木」かあるいは「高い所の田」から付けられた地名であろうという意見もあるが、右に挙げた通り、そのほとんどが海や川に面した平野、そして、現在その地域の中心地に近いところばかりである。高い木や高い田が在りそうな山間部にはまず見られない。

高木・高田の地名は古代から栄え、人口の多いところである。出雲も出雲神信仰を広めるのにそこを狙った。

出雲神を祀る著名な古社・大社の近くに高木・高田の地名が存在する。

- 大神神社 — 奈良県桜井市高田・高家・高宮（三輪）
- 下鴨神社 — 京都市左京区下鴨高木町・西高木町・東高木町
- 御上神社 — 滋賀県野洲市高木
- 粟鹿神社 — 兵庫県朝来市和田山町高田
- 射楯兵主神社 — 兵庫県姫路市花田町高木
- 真清田神社 — 愛知県一宮市高田
- 諏訪大社 — 長野県諏訪郡下諏訪町高木

所在が不明だが旧度会郡高田郷のそばに、外宮は建てられたと思われる。おそらく「高田」  
— 「神田（こうだ）」から、皇学館大学が立つ伊勢市神田久志本町ではないかと思われる。

## 出雲も朝鮮半島から日本を守った

---

皇孫ニニギ尊が異民族平定のために九州遠征（天孫降臨）を行ってから五百年後、再び朝鮮半島の新羅が九州を狙った。（四世紀末）

この時は、神功皇后のもとで三輪氏が主力となり、朝鮮半島まで攻め込んで新羅を屈服させた。先祖が犯した罪を子孫が償った形となった。

古代ギリシャは国の意見をまとめるのに多数決を採用した。しかし、日本は皇室を選出した。人が大勢集まると、意見は必ず四つに分かれる。

試しに人に「人生にとって大事なものは何ですか」と尋ねてみれば、返ってくる返事は「競争」「成長」「成功」「貢献」の四つである。

事柄の是非を判断するモノサシも「大小」「正誤」「強弱」「善悪」の四つである。

レストランでメニューを選ぶ時も「量」「旬」「値段」「調理法」の四つで判断する。旅行先を選ぶのも「距離」「日数」「費用」「目的」の四つで選ぶ。

物事の本質には四つの側面がある...のではなく、人間の認識能力の限界。人はどうしても四つの立場に偏って見ざるを得ないのである。

四つの意見はどれも正しさも間違いも等しい。ただその時の状況が優先を決めるに過ぎない。

「ヨーロッパでは言葉の明瞭であることを求め、曖昧な言葉を避ける。日本では曖昧な言葉が一番優れた言葉で、もっとも重んじられている。」と宣教師フロイトをして言わしめたように、日本語は否定語や関係を表す言葉が語尾に付く。これは日本人が論理的に思考するのが不得意なのではなく、相手の言葉の中にも真理があり、自分の言葉の中にも誤りがあることを知っていたからである。

聖徳太子も十七条憲法の中で「人みな心あり。心おのおの執着するところあり。」「彼も我もともに凡夫」「われ一人得たりと雖も、衆に従って同じく行え」と諭し、そして「詔を承りてば必ず謹め」と言っている。

多数決だけでは国の進路を誤ることは、昨今の政治が証明している。私達の先祖は、その代わりに無私立場に立つ人を選出し、その人が優先順位を決定（聖断）するというシステムを考え出したのであった。それが皇室の存在意義である。

明治維新も、皇室が存在したおかげで、大きな内戦にまでならず完成させることができた。

大東亜戦争においても、決定的に破壊される寸前に降伏する決断など、天皇以外には誰も為し得なかった。

そして、国土が焼土と化していても、昭和天皇が大黒柱として国の中心に揺るぐことなく立ち続けられたおかげで、日本は赤化されることもなく、世界が驚くほどのスピードと規模で復活することができた。

スメラ尊には古代より姓がない。姓の起源は判らないほど古いが、人口が増えたので他と区別する為に創られた。したがってスメラ尊は人口が増える弥生時代以前に誕生したと考えられる。

敗戦後の自虐史観は、皇室の祖は支那人や朝鮮人であると言い、また最近のスピリチュアル（

心霊) 史観は、在りもしない日神の子孫だという。

しかし、TVも新聞も無い古代から現代に至るまで、『記紀』にも讃えられず、神社にも祀られていない皇祖皇宗が、なぜ人々から途切れることもなく敬愛され続けのか。

それは皇祖天照大神が、紀元前一世紀に起きた異民族の侵略から、日本列島を守った日本民族にとっての大恩人であったからである。

これから数年、あるいは数十年の間に欧米諸国やロシア・支那が没落し近代が終了する。そうして新しい時代がその幕を開けるが、日本も大波を被ることになる。

この時に当たり、日本がその危機を乗り越えるには、各人がみずからの国のアイデンティティ（国体）を再認識する必要がある。

そのために日本人のための本物の古代史を書き上げたいと思い筆を取った。

はたしてその目的が果たせたかどうか、後の評価に委ねたい。